

宮沢賢治「オツベルと象」論

——関係の成立と崩壊——

藤井彩夏

序論

「オツベルと象」は、一九二六年一月に雑誌「月曜」¹の創刊号に発表された。紙幅の関係上、膨大な先行研究のうち、本稿に直接関係しない論考の具体的な記載を行うことはできないが、短編でありながら、多数の疑問点が残る作品であり、研究者によってさまざまな面から論じられてきた。当初、賢治が花巻農学校を退職する年に発表された作品であることから、賢治の生き方と結び付けて論じられることがあった。また、作品内の白象の労働の部分により、賢治の労働観や抵抗の意図を読み取る論が展開されていた。

しかし、その中で次第に作家論とは切り離されて、「オツベルと象」の作品自体を論ずる作品論が展開されていくようになる。論じられる点ではなかったが、特に題名にも表れているオツベルと白象に対して言及する論が多かった。

オツベルや白象の特徴を読み取り、論じているものが多い中で注目すべき点は、それらがオツベル・白象のどちらかの側から論じられている点である。白象の要請によって山の象どもがオツベルを襲撃するという結末から、オツベルと白象を分断してどちらかに焦点をあてて論じているのである。オツベルの立場に立つて、白象を否定的に捉える論もあれば、逆に白象の立場に立つて、オツベルを否定的に捉える論もある。

けれども、ここで再考すべきなのは、「オツベルと象」が題名の示す通り、オツベルと白象の両者の関係の物語だという点である。本論では、オツベルと白象の持つ特徴をふまえた上で両者の関係性に焦点をあてて論じていきたい。そして、この作品の設定や本文中の表現を通して、オツベルと白象の関係性が作品の中で提示する普遍的な主題を考察していく。

第一章 特別視される白象

作品の主人公である象は白象として描かれている。なぜ、賢治はあえて主人公を白象として設定したのか。考察していきたい。

先行研究では、宇佐美氏が「白象は、近代資本主義の下での労働の矛盾を明らかにするために登場して来る。」とし、工藤氏が、「白象に設定して『厄介な所持物（維持費を多く要する）』という秘めた意味を担わせた」としているように、賢治が「オツベルと象」の中で、白象を用いたことに関しては解釈が分かれている。

はじめに、登場人物が白象に関して述べた部分について論じる。第一に、登場人物が捉える白象の価値について述べる。本文中で語り手は「第一みかけがまつ白」というように、力よりも外見に価値があるとしている。ここから、白象の価値は、一般的にその外見の持つ商品としての価値であることが分かる。次に、「山の象ども」の白象に対する認識について述べる。白象が「山の象ども」に助けられたときの描写では、「あの白象は大へん瘠せて小屋を出た。『まあよかつたねやせたねえ。』とされている。ここでは、象達や語り手の言葉には、白象が瘠せたという外見についての特徴ばかり特筆されている。他者から白象の存在が語られるときには、常に外見についての情報が取り上げられているのである。

第二に、白象を見た時の人々の反応について述べる。この白象

が現われた時の人々の反応を挙げる。

そいつが小屋の入口に、ゆつくり顔を出したとき、百姓どもはぎよつとした。なぜぎよつとした？よくき（く）ねえ、何をしだすか知れないぢやないか。かかり合つては大へんだから、どいつもみな、いつしやうけんめい、じぶんの稲を扱いてゐた。

「百姓ども」は急に現われた白象の存在を恐れ、見ようともしない。これは、一般的な反応であると語り手は述べており、「百姓ども」が白象の視覚的な受け入れを拒否し、逃避していることを示している。オツベルの反応は異なり、「ちらつと鋭く象を見る。白象の外見に恐れを抱き、見ないことで存在の受け入れを拒否する「百姓ども」と、自分から白象の存在を捉えようとするオツベル。この対比は、オツベルと白象のこれからはじまる関係性を示唆している。

このことから考えると、白象は、珍しい白い姿を持つことから、仲間の象や人々に外見のみに注目され、実際に持っている力の方にはまったく目を向けてこれなかったのではないだろうか。対してオツベルの価値基準の最も大きな部分は、自分の利益となるか、利益を生み出す労働力を持っているかという点である。これは、「みかけがまつ白で、牙はぜんたいきれいな象牙できてゐる。皮も全体、立派で丈夫な象皮」である商品としての

価値の高い白象を、そのまま売り飛ばすことはせず、自分のもとで働かせ続けたことから読み取れる。白象の持つ労働力を評価するオツベルと、初めて外見以外の自分の持つ本質的な力を評価された白象という特殊な関係性はここからすでに始まっていることが示されているのである。

第三に、本文中の白象の呼び方について述べる。香取氏は「牛飼はオツベルに囚われた白象を、ただ、象とだけしか語っていないことのほうが多いのである。」と言及しており、白象が周囲から外見を特別視されていないとしている。私はその論とは少し異なり、白象の外見を意識していないのはオツベルのみであると考える。語りの中で白象の呼び方は、途中で象に変化する。それは、オツベルが白象を見る部分である。そして、徐々に、物語の中で常に象として扱われるようになっていく。これは、白象を一頭の象として捉えるオツベルの視点¹⁾が、語りの部分に生じてくるからだ²⁾と考える。そして、この視点はオツベルが象達に潰される場面、すなわちオツベルと白象の関係の崩壊とともに失われる。オツベルが「くしやくしやくに潰れて」しまったあと、白象が象として記述されることはなく、必ず「白象」とされているのである。

また、オツベルが白象を象として扱うことにはもう一つの側面がある。それは、白象の個人としての性格が捨象されることである。作品内で名前を持つのはオツベルのみである。オツベルのみ名前を与えられることで、人格が与えられ焦点があてられてい

る。「百姓ども」や「山の象ども」は常に集団として扱われる。そして、白象は、名前は無いが、個人として扱われる立場で登場すること、個人に限定されるからである。しかし、白象はオツベルにより象とされる。これは、集団の一部として個人の性格を捨象し、単なる労働力として扱おうとする側面も持つのである。

最後に、白象の喜びについて述べる。「オツベルと象」において、白象が労働の純粹な喜びを表す存在であるとする先行研究が多く存在する。私は、労働の喜びとともに、自分自身の白象としてではなく一頭の象としての力、本質的な力を示すことのできる喜びがあると考える。「山の象ども」が現われる場面では、象達は碁を打っており、労働する存在でないことが描きだされている。対して、白象が「眼を細くしてよろんこんで」いる部分は、水を汲む部分やたきぎを運ぶという労働を行う部分である。また、オツベルが炭火を吹くのを頼んだとき「『ああ、吹いてやろう。本気でやったら、ほく、もう、息で、石も（なげ）とばせるよ』」と白象は答える。これは、自分自身が必要とされている喜び、白象が労働することで自分の持っている力を示すことのできる喜び、また自分の持つ力が徐々に強くなっていく喜びを表していると考ええる。

「オツベルと象」では、白象が自分の力を必要とされ、それを示せること、自分の力が徐々に成長していくことに喜びを感じていく。しかし、白象を一頭の象として捉え、力を発揮する場所を

提供したオツベルは徐々に見えてくる白象の力、成長する白象に恐怖を感じるようになっていく。恐怖により白象を自分の下におさえようとする行動が、逆に白象を追い詰めてしまう。「オツベルと象」はこのようにオツベルと白象が出会い、互いにとつて利益のある関係を築いていたのが、徐々にすれ違っていく関係性の不幸を描いた作品であると考える。そして、作品は白象のさびしい笑いで結末を迎える。これは白象がオツベルとの関係を失うことで自分の能力を発揮する場所を失い、もとの外見のみに価値を置かれる白象に戻ってしまったさびしさを表しているのである。

第二章 オツベルと白象の関係の成立から崩壊

オツベルと白象の関係には、互いの認識に成立当時からずれが生じていて、それが徐々に大きくなり、関係の崩壊を迎える。本文中の表現を取り上げながら考察したい。

まず、オツベルと白象の関係の成立について考察する。オツベルと白象が出会った後、関係が成立する部分は、オツベルの「『ずうつとこつちに居たらどうだい。』」という提案を白象が「『居てもいいよ。』」と承諾する部分である。着目したいのはオツベルと白象が、互いの関係の在り方を決定づける言葉を言っていない点である。これによりオツベルと白象には認識のずれが生じている。オツベルは自分のもとに留まること、オツベルが雇用者、白象が労働者として関係を築くことであると捉えている。け

れども、白象にとつて提案は、単純に場所に留まるというものではない。ここには「オツベルと象」の作品内における場所の問題が深く関係している。

作品内の場所は、本文中の表現から山・林・野原・オツベルのやしき(象小屋)という順で配置されていることが分かる。この位置関係の特徴はオツベルのやしきと山という最も離れた場所が反対の性質を持って存在していることである。オツベルのやしきは、作品冒頭に登場する稲扱小屋に象徴される。稲扱小屋は、「稲扱器械の六台も据えつけて」「十六人の百姓ども」を雇い、働かせる労働の空間である。反対に山は、「沙羅樹の下のくらがりで、碁などをやつてゐた」という行動に象徴される娯楽の空間である。私は、山からオツベルのやしきの配置が、娯楽から労働という特徴の変化を持つと考える。作品内でそれを暗示する部分を挙げる。まず、はじめて白象が稲扱小屋へ行った部分では、「〔略〕あんまりせわしく、砂がわたしの歯にあたる。〔二〕」まづたく初は、パチパチパチ歯にあたり、またまづ白な頭や首にぶつつかる。」というように描かれる。「百姓ども」の労働の成果を象徴的に表す初を邪魔な異物である砂として捉える白象の姿は、労働が存在しない場所からやつてきたことを示している。次に、白象がオツベルにたきぎを拾つてくるのを命令された部分では、「『ぼくはぜんたい森へ行くのは大すぎなんだ』」という言葉を受け、「オツベルは少しぎよつとして、パイプを手からあぶなく落しさうに」する。森は、象がいる可能性の高い場所として作

品内で扱われている。そして、林と森を同等のものと考えらるならば、森は山に特に近い場所ということになる。オツベルは、この白象の言葉から、娯楽の空間に近い場所を好むという意味を読み取り、白象が自分の支配下の労働の場から離れることを恐れ、動揺したのではないだろうか。

このように考えていくと、オツベルは稲扱小屋にいることに、自分のための労働者になるという意味をこめて見るのに対し、白象は単なる場所としてしか捉えず、そこに意味を見出せていないという状況がより明確になってくる。初めの存在いわば労働の存在を知らない白象が、オツベルの意図を理解しない可能性は高い。白象の側は、オツベルの提案を、対等な関係を築くこととしてのみ捉えているのではないか。それは、白象がオツベルに話しかける言葉の一人称が「わたし」から「ぼく」に、提案を受け入れた後変化することから読み取れる。白象が「山の象ども」に話しかけるときの一人称も「ぼく」であることから、「ぼく」という一人称に、白象がある程度の関係の成立という意味をこめてみると考えられる。

次に、オツベルと白象が互いの関係性をどのように捉えていたかについて考察する。オツベルと白象が想定している両者の関係は異なっている。それは、オツベルが白象に仕事を課す場面に表れる。

「済まないが税金も高いから、今日はすこし、川から水を

汲んでくれ。」オツベルは両手をうしろで組んで、顔をしかめて象に云ふ。「ああ、ぼく水を汲んで来やう。もう何ぱいでも汲んでやるよ。」

象は眼を細くしてよろこんで、

まず、オツベルから白象への対応のしかたを検証する。遠藤氏が「大勢の人間を支配するおのれの（えらさ）を誇示する意識が、そこから顔をのぞかせる。」と指摘するように、オツベルは両手を後ろで組むことで自分自身の威厳を示そうとする。対して白象は、オツベルを決して自分の上に立つ者、雇用者としていない。オツベルの命令を、常に頼みごとというように捉えている。それはオツベルに対する白象の言葉から読み取れる。白象は、「汲んでやるよ。」のように「くしてやる」という言い方で命令を承諾する。これは、「同等またはそれに近い目下のものの動作について、丁寧に、また親愛の気持ちで用いる」表現であることから、白象にとって、命令は自分への頼みごとにならず、それをきいてあげる立場だとしていることが分かる。この立場は、関係の成立時すなわちオツベルの提案を白象が「『居てもいいよ。』という『同意』でできる。さしつかえない。」との意味を持つ言葉で承諾した時から示している。また、白象がオツベルへ用いるのは常にくだけた言葉遣いであり、「百姓ども」の「旦那あ、象です。押し寄せました。」という敬語とは一線を画している。

最後に、オツベルと白象の関係の変化について考察する。両者

の関係は、オツベルが提案して白象が承諾することで展開されていく。まず、白象に命令するオツベルに着目する。初めの方のオツベルは、「顔をしかめて」というように、命令する済まなさ申し訳なさを自分の表情で示す。その後、オツベルは白象の承諾を受けて、「少しきよつと」たり、「まだきよつとした」りするようになる。これは、オツベルが白象の力を脅威すると同時に、命令が、見返りに見合っていないことを後ろめたく感じ、理不尽な命令をしているとの自覚があるのを示している。はじめは、心苦しく思っていたオツベルも白象が笑って承諾してくれることで安心感を抱き、手の中に入った労働力である白象を徐々に追い詰め、限度をこえていく。一方で白象は、オツベルに労働力として必要とされ頼みごとをされること、自分の力が限りなく強大になり、その力を試したいと考えるようになることで自分自身を追い詰めていってしまう。笑って許されることで、安心して次第に要求をエスカレートさせるオツベルと、オツベルの要求を笑って受け入れ、自分の力を試し続けようとする白象は、その関係性を保つことができず、齟齬が生じてくる。(第五日曜)の冒頭から「象がなかなか笑はなくなつていくのである。笑うことが許すことであると象徴的に示してきた作品内で、白象の笑顔がなくなつたことを特別に語るのは、二人の関係性の崩壊を示唆している」という意味を持つ。

「オツベルと象」は、緊張感を失くし、甘えを抱いた関係が崩壊するという、人間関係に起こりがちな事象を取り扱っている作

品なのである。オツベルと白象の不幸は、それを労働の契約関係の場に持ち込んだことであつた。対等な人間関係の場では、生じた齟齬から単に関係が崩れ、解消に向かうことで終了する。しかし、オツベルと白象は自分達を契約関係におき、関係の解消を容易に行えないようにしてしまった。互いの利益を追求する場である契約関係に、人間関係で起こりうる事象を持ちこんだことで、オツベルと白象は互いに不幸で最悪のかたちでしか関係を崩壊させることができなかつたのである。

第三章 集団の中の個として対峙するオツベルと白象

オツベルと白象という主人公の設定は、どのような効果を持つのか。オツベルと白象とがそれぞれの種の中で特異なものとして描かれていることについて考察する。

「オツベルと象」では、人間の中で特異な存在であるオツベルと、象の中で特異な存在である白象が多数の中の個として対峙している関係性が描かれている。私は、この設定がオツベルと白象の関係の特異性につながっていると考える。人間と象の二つの集団の中で、オツベルと白象のみを抽出して描き出すことで、集団の中の個としての一人と一頭の関係の成立と崩壊に焦点をあてて描き出すことができたのである。

そして、オツベルと白象の関係の崩壊に関する要因も、二人と、その他の集団との関わりの中で表れる。二人の関係を決定的

に崩壊させたのは、他者の介入であった。白象が「山の象ども」に出した手紙は、「ぼくはずるぶん眼にあつてゐる。みんな出てきて助けてくれ。」という一言である。この手紙を見て、「山の象ども」は「『オツベルをやつつけやう』という結論に至り、襲撃しに行く。ここで、白象の助けの要請を「山の象ども」は、オツベルを倒してほしいという意味にすぐに読みかえている。また、白象を助ける場面では、「牢はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。」というように、白象のいる「小屋」を「牢」と呼ぶ。ここから、「山の象ども」はオツベルと白象が築いてきた関係を、自分達で勝手に変換して解釈していることが分かる。このような認識のずれからオツベルが「潰れて」しまう結末に行き着く。二人の関係を修復不可能な状態にしたのは二人以外の他者の介入だったのである。オツベル達人間と白象達象は、戦いの場面を迎える。「こんな主人に巻き添ひなんぞ食ひたくないから、みんなタオルやはんげちや、よごれたやうな白いやうなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をするしるしなのだ。」という「百姓ども」の様子に象徴されるようにオツベルは人間の集団の中で孤立していく。最後の味方であったかのように見えた「オツベルの犬」も象の顔を見た時に「気絶」する。「山の象ども」に助けられた白象も、「まあ、よかつたねやせたねえ。」と外見に関する言葉をかけられ自分の孤立を実感し、「さびしくわらつて」作品は終末を迎える。最終的に残つたのは、やはり集団の中の個として孤立するオツベルと白象の姿だったのである。

結論

「オツベルと象」における白象は、常に珍しい外見に価値を置かれて扱われてきた。象の中で一人異質な外見を持ち注目され、人間達もただの象にはない白象の白さ、象牙、象皮等の外見の価値を賞賛した。そのような中で、唯一白象を一頭の象として扱つたのはオツベルであった。オツベルは白象の外見の価値よりも、一頭の象としての価値を評価する。白象の労働力に注目し、働く機会を与える。白象は自分の本質的な力を試すことができること、また自分の力が必要とされること、自分の力が徐々に強大になることに喜びを感じる。けれども、そのような白象に恐怖を抱いたのは、白象に機会を与えたオツベルであった。

オツベルと白象は相互利益のある存在であると互いを捉えていたが、その関係の認識のずれは出会いの部分から生じていた。両者は自分達の関係の在り方を決定づける言葉を、最初から最後まで言わないことで、互いの関係の認識を共有することができなかつたのである。オツベルは自分自身を雇用者、白象を労働者とし、命令をしていく。その一方で白象は、オツベルの頼みを常にきき入れてあげるという姿勢を貫く。オツベルは自分の命令を笑って受け入れる白象を見て、命令をエスカレートさせていく。白象は、自分の力が必要とされること、自分の強大になりゆく力を試すことができることで、より過酷な条件をのむとする。この

ような甘えのある関係を、相互利益を目指す契約関係に持ちこんだことで、関係は徐々に崩壊に向かっていく。

そしてオツベルと白象の関係の崩壊を決定づけたのは、二人以外の他者の介入であった。白象の助けの要望に答えた「山の象ども」は、オツベルと白象の関係を対立関係として捉え、オツベルを倒すことを目標とする。「山の象ども」との戦いの中で、「百姓ども」に裏切られたオツベルは作品内で自分自身の孤立を明確にする。その一方で、「山の象ども」は白象のために戦った。しかし、助け出された白象への言葉はやはり外見に関するものであった。白象は「山の象ども」の中で、もとの外見のみに価値を置かれる白象に戻ったことを自覚し、「さびしい笑い」を浮かべる。結局最後に残ったのは集団の中の個として対峙する孤立したオツベルと白象の姿であった。

「オツベルと象」は、白象がオツベルのもとで二頭の象として生きることできた限りある時間を描いた作品であり、オツベルと白象の関係の成立と崩壊を通して、他者との関係性のはらむ問題を主題として提示しているのである。

注

- (1) 以下「オツベルと象」の引用は『新校本宮澤賢治全集 第十二巻』（筑摩書房、一九九五年十一月）に拠った。テキスト引用部分の「」の部分に関しては、底本で用いられている部分をそのまま引用している。このことに関して

は同書に、「草稿・原文を校訂して本文を決定した場合には、本文の該当部分を「」で括って示し、「校異」篇末尾の「校訂一覧」に必要に応じて根拠を示しつつ記載する。」と説明されている。

- (2) 宇佐美真『オツベルと象』―疎外された労働への諷刺』（解釈・国語・国文四九―一・二、寧楽書房、二〇〇三年二月）
- (3) 工藤哲夫『オツベルと象』の象、又は白象（女子大國文二三四、京都女子大学・京都女子大学短期大学部、二〇〇三年十二月）
- (4) 香取直一『オツベルと象』の白―黒系列と赤（国文学解釈と鑑賞五八（九）至文堂、一九九三年九月）
- (5) 遠藤祐「十一月」の物語―『オツベルと象』は誰に語られたか―（学苑（七五七）光葉会、二〇〇三年十月）
- (6) 『日本国語大辞典第二版 第十三巻』（小学館、二〇〇二年一月）
- (7) 注（6）に同じ

（ふじい・あやか 二〇一二年本学卒業生）
／滋賀県立東大津高校教諭